

読み聞かせをやってみて思うこと

新治村 生津 裕子

「ねえ、読み聞かせをやってみなない。」

私が読み聞かせを始めるきっかけになったのは、村の読み聞かせグループの代表の方のこの一言でした。それまで、村の公民館の図書室や、育児サークルで行われる読み聞かせでは、子供と一緒に聞き手専門であり、自分が読み手になろうとは思っていませんでした。「人前で読むなんてとても無理...。」と言ったところ、「いつも自分の子供に読んであげているようにやればいいんだから。」と言われ、引き受けることにしました。当時、うちの子は、小学校低学年、幼稚園児、2才児の3人で、家ではよく絵本を読んであげていました。が、読み聞かせとなると色々違うわけで、たとえ相手が小さな子供たちであっても、初めて読んだ時はとても緊張したのをおぼえています。本を読むことを楽しむ余裕など、残念ながら全くありませんでした。その後、回数を重ねるにつれて、緊張することも少なくなりました。他の人が読んでいるのを聞いたり、研修会等にも参加して、どうしたら上手にできるか、子供たちが楽しめるかを考えるようになりました。

読書は子供たちにいろいろな感動を与えるとともに、考える力、表現力、知識を高めてくれるものです。特に字の読めない小さい子には、読み聞かせをすることで本の楽しさを知り、関心をもってもらえば、のちのち自分から進んで読書するようになるのではないかと思います。あとは環境です。読みたい本を全て購入するのは、金銭的にもスペース的にも大変です。図書館等をうまく利用して、子供の手の届く所に本を置いておけば、自然と手が伸びるのではないのでしょうか。

ある時、読み聞かせグループの1人が「5、6年生に読むには、どんな本がいいのかなぁ。」と言っているのを聞いて、私は驚きました。

それは、読み聞かせは小さい子にするものだという考えが、私にあったからでした。しかし、研修会に参加した時に、講師の先生の「読み聞かせは何才になってもしてあげていい。今の子供たちは語いが少なく、表現力や理解力を向上させるには高学年への読み聞かせは大切だ」との言葉に、改めて読み聞かせの意義を感じました。文章の内容を理解することは国語だけでなく、他の教科においても必要なことです。そのためにも、読書は大切なのです。

読書に興味をもたせるには、適した時期に適した本を渡してやる必要があります。小学校の国語の授業で「ちいちゃんのかげおくり」という戦争の話の単元を学習している時、先生から村の図書室へ「戦争にかかわる話の絵本を貸して下さい。」という申し出がありました。図書室の担当者は、その学年に合った本を選んで学校へ届けました。また、動物の物語の単元の時動物のてくる絵本をやはりその学年に合わせて選びました。子供が読みたいと思う時に、本を与えてあげるのがよいのです。そしてそういう本は、期限がきたら返却するということもあり、子供たちには人気があるそうです。

私たちの読み聞かせグループは月に1度、公民館の図書室で読み聞かせをしています。午後3時30分からのので、来るのは幼児と小学1、2年生が中心です。ただ残念なのは、図書室に徒歩で来られる人は少なく、ほとんどの人は車を利用しなければ来ることができません。ですから、行きたくても親の都合がつかなければ行けないのが現状なのです。

今年は県教育委員会の「学校支援隊」の奨励事業として、村内の小学校でも読み聞かせをしています。私の子供が通っている猿ヶ京小は3年目になり、子供たちにもだいぶ定着してきました。月に2度、朝行事の時間に、低・中・高学年の3グループに分かれて行っています。低学年の子は絵本を読んだ後、感じたことを話してくれる時もあるし、高学年は真剣に聞いてくれます。20分間の短い時間ですが、本に触れ合う大切な時間なのです。また、最初は読み聞かせグループのメンバーだけでやっていましたが、昨年からは保護者も何人が参加するようになり、今年度は更に増えました。やはり、子供たちに本に親しんでもらおうという思いから参加しているのでしょう。

先日、読売新聞に、女優の中井貴恵さんの記事が載っていました。幼稚園、小中学校、病院など600か所で読み聞かせをしたそうです。よくある読み聞かせと違い、伴奏や照明があるそうで、記事を読む限り“劇”のような印象を受けました。が、活動に対する熱い思いは人一倍あると思いました。

私自身、読み聞かせを始めてから数年たち緊張することこそ少なくなりましたが、まだまだ修行中です。やはり経験の多い人は間の取り方、読み方も上手です。他の読み聞かせグループのやり方を見るのも、それぞれ独自のものがあって勉強になります。例えば、小さい子供が多い時は手あそびを交えながらやると飽きないし、長い話の後は短い話にするなど本の組み合わせ方を工夫するやり方もあります。声は大きい方がよく聞こえるので良いと思っていましたが、この間、小学校で行われた講習会の時の先生は、優しく語りかけるような読み方で、聞いていて、とても心地良く感じました。聞き手の立場になると、気付くこともいろいろあり、勉強になりました。

このごろ、小学1年生になった末っ子は、「お母さん、僕が読み聞かせしてあげる。」と言って、絵本を読んでもくれることがあります。きっと、読んでもらうことの楽しさがわかってきたからではないでしょうか。大人でも絵本を読んでもらうと、絵もゆっくり見られるし、絵本の世界に入りこめるので楽しいものです。読み手と聞き手が一緒に楽しめた時は最高だと思います。

小さい子供たちは素直ですから、おもしろい場面では声を出して笑ってくれるし、ドキドキする場面では一緒にドキドキしてくれます。そして読み終えた時、その本が気に入れば「もう一回読んで！」と何度も同じ本を持ってくるのです。そして本を読むことの楽しさに気付いてくれれば、大きくなってもしっかりとたくさん読書をすると思います。忙しくてなかなか時間がとれないこともあるかもしれませんが、心豊かに成長して欲しいと思います。